

# Einstein structure の deformation

阪大 数学

小磯憲史

問題 Einstein structure を smooth に変形できることは、どの程度可能か？

Einstein deformation. 即ち Einstein structure の変形は、flat torus を “歪める” ことなど、自然な例しか知られていない。そこで、逆に「自然な deformation 以外はない」という予想のもとに、この部分的な結果を紹介する。具体的に例は、次の定理の応用として示す水子。

定理 Einstein manifold  $(M, g)$  に関する  $\varepsilon$  の curvature

operator の最小固有値を  $d_0$  とする。Ricci tensor  $\rho$  に対して  $\rho = \varepsilon g$  を満たすことができる。  $d_0 > \min\{\varepsilon, -\frac{1}{2}\varepsilon\}$  ならば、 $g$  は infinitesimally non-deformable である。

§0 準備

まず、 $C^\infty$ -manifold  $M$  は orientable, connected, compact,

$\dim M = m \geq 3$  と仮定できる。Riemannian manifold  $(M, g)$  に対して、以下の記号を使用できる。type  $(0, 2)$  の symmetric tensor bundle  $S^2$ ,  $M$  上の tensor bundle  $T$  に対して、 $h$  の cross section 全体  $C^\infty(T)$ , 一点における内積  $(\cdot, \cdot)$ , global 内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$ , 共変微分  $\nabla$ , curvature tensor  $R$ , Ricci tensor  $\rho$ ,  $h$  に対して  $f R \in S^2$ ;  $h R = 0 \in S^2_0$  と仮定できる。又、 $\nabla$  の  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  に関する formal adjoint を  $\delta$  とし、 $\delta | C^\infty(S^2)$  の formal adjoint を  $\delta^*$  と仮定する。更に関数に対して Laplacian  $\Delta$  と tensor bundle に対して rough Laplacian  $\bar{\Delta}$  をそれぞれ  $\Delta = \delta \circ \delta$ ,  $\bar{\Delta} = \delta \circ \nabla$  により定義できる。

又、 $\nabla, R$  などには metric に関係するもの、 $g(t)$  により定義するもの  $\in \mathbb{V}_t$ ,  $R(t)$  などと仮定する。又、tensor の添数  $\alpha$  上での下向きは  $\nabla$  の  $g(t)$  によるものとし、' は上向き  $\nabla$  の  $\alpha$  上での  $\nabla$  による微分を表す。

以上で導入した記号により左式を表現する。

$$\begin{aligned}
 R_{ij}^k &= \nabla_i \nabla_j \xi^k - \nabla_j \nabla_i \xi^k, & R_{ijkl} &= R_{ij}^m g_{mk}, & \rho_{ij} &= -R_{ij}^k g_{kl} \\
 (\delta S)_{j_2 \dots j_s}^{i_1 \dots i_r} &= -\nabla^l \nabla_{l j_2 \dots j_s}^{i_1 \dots i_r}, & (\delta^* \xi)_{ij} &= \frac{1}{2} (\nabla_i \xi_j + \nabla_j \xi_i) \\
 \Delta f &= -\nabla^l \nabla_l f, & (\bar{\Delta} S)_{j_1 \dots j_s}^{i_1 \dots i_r} &= -\nabla^l \nabla_l S_{j_1 \dots j_s}^{i_1 \dots i_r}
 \end{aligned}$$

したがって、体積一定の 1-parameter の metric  $g(t)$  が  $g(0) = g$  を満たすことを、 $g(t)$  が  $g$  の deformation と呼ぶ。これは  $\rightarrow$  である。次の定理が有効である。

定理 (D. Ebin)  $g(t)$  は  $g$  の deformation であり。  $g$  の deformation  $\tilde{g}(t)$  と 1 径数変換群  $r(t)$  が存在して、十分小なる  $t$  に対して次の式が満たされる。  
 $r(t)^* \tilde{g}(t) = g(t) \quad , \quad \delta(\tilde{g}'(0)) = 0$

$h = \tilde{g}'(0)$  の  $\text{ker } \delta$  は essential i-deformation といふ。又、1 径数変換群  $\tilde{r}(t)$  により  $\frac{d}{dt}|_0 \tilde{r}(t)^* g = 2\delta^* \tilde{\xi}$  ( $\tilde{\xi}$  は  $\tilde{r}'(0)$  の dual 1-form) となるから、  $\text{Im } \delta^*$  は trivial i-deformation といふ。

### § 1 Einstein i-deformation

以下、  $(M, g)$  は Einstein manifold とし、  $g(t)$  も Einstein deformation、即ち  $g(t)$  が  $\Lambda^n$  上の Einstein metric である deformation を意味するものとする。更に、  $\rho(t) = \varepsilon(t) \times g(t)$  とし  $\varepsilon(t)$  を定数とする。

すなわち、  $g'(0)$  が満たされるべき式を求めよう。一般に、

$$\rho' = \frac{1}{2} (L \Delta g' + 2\theta g' + 2Lg' - 2\delta^* \delta g' - \text{Hess}_g g')$$

ここで、  $\theta$  は Ricci operator、  $L$  は curvature operator、

i.e.  $(\theta R)_{ij} = \frac{1}{2} (\rho_i^k R_{jk} + \rho_j^k R_{ik})$ ,  $(LR)_{ij} = R_{ikj\ell} R^{\ell k}$ ,

- 且、  $\rho' = \varepsilon' g + \varepsilon g'$

又、  $R \in C^\infty(S^2)$ ,  $\xi \in C^\infty(A^1)$ ,  $f \in C^\infty(M)$  に対して

$$L \Delta R = -\nabla^i \nabla_i R = \Delta R, \quad \delta \text{Hess } f = g^{ij} \nabla_i \nabla_j f = -\Delta f$$

$tLR = g^{ij} R_{i\varepsilon j\varepsilon} t^{\varepsilon\varepsilon} = -tQR$ ,  $t\delta^* \xi = \frac{1}{2} g^{ij} (\nabla_i \xi_j + \nabla_j \xi_i) = -\delta^* \xi$   
 であるから、両式の右辺に  $t$  が作用して成れば、

$$m\varepsilon' + \varepsilon tg' = \Delta tg' + \delta\delta^* g'$$

積分して、 $m\varepsilon' \langle 1, 1 \rangle + \varepsilon \langle g', g \rangle = 0$

体積一定だから  $\langle g', g \rangle = 0$  従って  $\varepsilon' = 0$  ..... (\*)

更に、 $g'(0)$  が essential であることに仮定すれば、

$$\varepsilon tg' = \Delta tg'$$

と成る。  $\varepsilon$  なる  $\Delta$  の 0 でない固有値は存在しないから、

$\varepsilon \neq 0$  なる  $tg' = 0$ 。  $\varepsilon = 0$  でも、 $tg'$  は定数となる。積分可  
 れば体積一定の条件から  $tg' = 0$  を得る。そこで、次の定義  
 を与えよう。

定義 essential  $i$ -deformation  $h$  が  $\Delta h + 2LR = 0$ ,

$tR = 0$  に満たされるとき、 $h$  は Einstein  $i$ -deformation といふ。

定義 Einstein  $i$ -deformation が 0 のみであるとき、

infinitesimally non-deformable であるといふ。

### 補題 1-1 (M. Berger)

$\varepsilon(t)$  は定数である。

(証明) 性質(\*)  $\varepsilon' = 0$  は  $t$  に depend しない。 Q.E.D.

系

(M.  $g$ ) が flat ならば、 $g(t)$  も flat である。

(証明) (M.  $g$ ) に対して、flat torus  $T^m$  を riemannian

covering にとる。この covering map  $\pi$  に対し、 $g(t)$  は  $\pi^*g$  の Einstein deformation  $\pi^*g(t)$  を引く可。この補題 1-11 による。  $\rho \pi^*g(t) = 0$  となる。従って Bochner の定理により  $(T^n, \pi^*g(t))$  の  $n$  個の独立な harmonic vector field  $\{X_i\}$  は parallel であり。よって  $\pi^*g(t)$  は flat。従って  $g(t)$  も flat である。 Q.E.D.

## § 2 基本定理

### 定理 2-1

curvature operator  $L: S_0^2 \rightarrow S_0^2$  の  $M_1$  における最小固有値を  $\alpha_0$  とおくと  $\alpha_0 > \min\{\epsilon, -\frac{1}{2}\epsilon\}$  を満たす Einstein 多様体は infinitesimally non-deformable である。

(証明)  $C^\infty(S_0^2)$  の元  $R$  に対し、

$$(\theta \nabla R)_{ij\epsilon} = x \nabla_i R_{j\epsilon} + y \nabla_j R_{\epsilon i} + z \nabla_\epsilon R_{ij}$$

( $x, y, z$  は  $x^2 + y^2 + z^2 = 1$  を満たす実数) とおく。

$x, y, z$  は  $x^2 + y^2 + z^2 = 1$  を満たす。  $u = xy + yz + zx = u$  とおくと  $u$  は  $[-\frac{1}{2}, 1]$  の中で動く。

$$\langle \theta \nabla R, \theta \nabla R \rangle = \langle \nabla R, \nabla R \rangle + 2u \langle \nabla_i R_{j\epsilon}, \nabla_\epsilon R_{ij} \rangle$$

$$= \langle \Delta R, R \rangle - 2u \langle \nabla^\epsilon \nabla_i R_{j\epsilon}, R_{ij} \rangle$$

$$\begin{aligned} \nabla^\epsilon \nabla_i R_{j\epsilon} &= -g^{\epsilon m} R_{mij}^\epsilon R_{\epsilon j} - g^{\epsilon m} R_{m\epsilon i}^\epsilon R_{j\epsilon} + \nabla_i \nabla^\epsilon R_{j\epsilon} \\ &= (LR)_{ij} + \rho_i^\epsilon R_{j\epsilon} - (\nabla \delta R)_{ij} \end{aligned}$$

従って  $\langle \Delta R - 2uLR - 2uER + 2u\nabla\delta R, R \rangle \geq 0$

ここで、 $R$  を 0 でない Einstein  $i$ -deformation とすれば、

$$\Delta R = 0, \quad \Delta R = -2LR$$

を満たすから、

$$UE \langle R, R \rangle \leq -(1+U) \langle LR, R \rangle$$

従って、  $\alpha_0 \leq \min \{ \varepsilon, -\frac{1}{2} \varepsilon^4 \}$

よって逆に  $\alpha_0 > \min \{ \varepsilon, -\frac{1}{2} \varepsilon^4 \}$  であれば、このまうな  $R$  は存在しない。 Q.E.D.

この定理が基本定理であり、以下の命題はすべてこの定理の適用である。

### §3 断面曲率に関する評価

まず、断面曲率が 0 に等しい次元  $\text{td}(W)$  を次のように定義する。多様体  $N$  の点  $p$  における正規直交系  $O_p = \{x_i\}_1^n$  に対して、 $\alpha_{ij} = -R_{ijij}$  は  $i \neq j$  のとき断面曲率を、 $i=j$  のときは 0 を与える。  $i_0$  に対して、 $\alpha_{ij}$  の  $j$  の個数を数え、 $p, O_p, i_0$  を動かしてその最大値を得る。この数を  $\text{td}(W)$  と記す。

### 命題 3-1

Einstein manifold  $(M, g)$  が非正断面曲率でしかも universal riemannian covering  $(\tilde{M}, \tilde{g})$  の既約分解  $\tilde{M} = \prod_{a=1}^k M_a$  に対して  $2 \text{td}(M_a) < \dim M_a$  が成り立つとき、 $g$  は infinitesimally non-deformable である。

(証明) (I) まず  $(\tilde{M}, \tilde{g})$  が既約なときを考える。  $\tilde{M}$  の一点

$m$  に対して,  $0$  でない  $R \in S^2$  について  $LR = \alpha R$  と可なり.  $R$  は対称だから, 適当な正規直交系で対角化して  $R^{ii} = x^i$  とおく.

すなわち,  $R_{ij} \in R^{ij} R^{jl} = \sum_j R_{ij} x^j x^j = - \sum_j A_{ij} x^i x^j$   
 とす.  $A_{ij}$  も対称であることを注意して,  $\sum_j A_{ij} y_j = \lambda y_i$   
 なる数ベクトル  $(y_i)$  を考える.  $\alpha$  とし,  $y_r = \max |y_i|$ ,  
 $A_{ri} < 0 \ (i > r)$ ;  $r = \text{fd}(\tilde{M})$  としおこう. 可なり  $\lambda > 0$  に  
 対して,

$$-\lambda y_r = - \sum_j A_{ij} y_j \geq \sum_j A_{ij} y_r = - \sum_j R_{ij} y_r = \rho_{rr} y_r \\ = \varepsilon y_r$$

従って,  $-\lambda \geq \varepsilon$  であり, 特には等号は  $y_i = -y_r \ (i > r)$  なるか  
 りに限るが,  $\alpha$  とす.

$$\sum_i y_i = \sum_{i \leq r} y_i + \sum_{i > r} y_i \leq -(m-r)y_r + r y_r = -(m-2r)y_r < 0$$

従って,  $\sum x^i = 0$  なる条件のもとでは,  $-\sum_j A_{ij} x^i x^j > \varepsilon \sum (x^i)^2$   
 とす.  $\alpha(R, R) = - \sum_j A_{ij} x^i x^j > \varepsilon \sum (x^i)^2 = \varepsilon(R, R)$

すなわち,  $\alpha > \varepsilon$

(iv) 一般に考えよう. 既約成分  $\wedge$  の分解は  $+$ ,  $+$ . curvature  
 tensor も分解可なり. 従って,  $\tilde{M}$  の metric  $\tilde{g}$  と Ricci tensor  
 $\tilde{\rho}$  は,  $\tilde{g} = \sum g_a$ ,  $\tilde{\rho} = \sum \rho_a$

(  $g_a, \rho_a$  は  $\tilde{M}_a$  の metric tensor, Ricci tensor )

と分解可なり.  $\rho_a = \varepsilon g_a$  と可なり. すなわち,  $S^2(\tilde{M}_1)$  の分解

$$S^2(\tilde{M}_1) = (\bigotimes S^2(\tilde{M}_a)) \oplus ((\bigotimes_{a \neq b} (R \cdot g_a)) \cap S^2(\tilde{M}_1)) \oplus \sum_{a \neq b} S^2(\tilde{M}_a, \tilde{M}_b)$$





$y^i = x^i \geq 0$  ( $i \leq c$ ),  $z^i = -x^i > 0$  ( $i > c$ ) としよ。  $\sum x^i = 0$  あり。  $\sum_{i \leq c} y^i = \sum_{i > c} z^i = A$  とおこう。 可なり。 条件式は  $\varepsilon > n(1-k) - 2$  と同値であり。 従って  $1 + \frac{1}{2} \varepsilon > 0$  であることに注意され。

$$\begin{aligned}
 (L.R.) + \frac{1}{2}(\varepsilon R.R.) &= -\sum_{i,j} \lambda_{ij} x^i x^j + \frac{1}{2} \varepsilon \sum (x^i)^2 + \sum x^i \sum x^j \\
 &= (1 + \frac{1}{2} \varepsilon) \left\{ \sum (y^i)^2 + \sum (z^j)^2 \right\} + \sum_{i,j} (1 - \lambda_{ij}) y^i y^j \\
 &\quad + \sum_{i,j} (1 - \lambda_{ij}) z^i z^j - 2 \sum (1 - \lambda_{ij}) y^i z^j \\
 &\geq (1 + \frac{1}{2} \varepsilon) \left( \frac{1}{2} A^2 + \frac{1}{n-c} A^2 \right) - 2(1-k) A^2 \\
 &\geq \left\{ \frac{4}{n} (1 + \frac{1}{2} \varepsilon) - 2(1-k) \right\} A^2 > 0 \quad \text{Q.E.D.}
 \end{aligned}$$

系

Einstein manifold  $(M, g)$  が  $n$  の断面曲率  $\frac{m-2}{2m-1}$  に含まれる。  $g$  は infinitesimally non-deformable である。

(証明) 1) を適用され。  $k > \frac{m-2}{2m-1}$  であるから、

$$1 - k < \frac{m+1}{2m-1} \quad \frac{\varepsilon}{m-1} > \frac{m-2}{2m-1} \quad \text{Q.E.D.}$$

#### §4 locally symmetric space of non-compact type

§3 の断面曲率による評価を示した。 locally symmetric space の場合は、より詳しい評価が可能である。 特に、non-compact type の場合は、次のような結果を得る。

#### 命題 4-1

locally symmetric space of non-compact type の Einstein

manifold  $M$  は、 $M$  の universal covering  $\tilde{M}$  が 2 次元の symmetric space を既約成分に持たなければ、infinitesimally non-deformable である。

(証明)  $\tilde{M} = G/K$  が既約な場合に  $\supset$  いて証すれば、命題 3-1 の証明 II と同じく、一般の場合に拡張される。ここで、 $G$  を実又は複素単純  $n$ -群とする。

$G/K$  の  $n$ -代数を  $\mathfrak{g}$ ,  $\mathfrak{k}$  とし、 $\mathfrak{g}$  の Killing form  $B$  による直交分解  $\mathfrak{g} = \mathfrak{k} + \mathfrak{m}$  を与えれば、 $0 = eK$  における tangent space  $T_0(\tilde{M})$  が  $\mathfrak{m}$  に同一視される。このとき、 $0$  における正規直交系  $\{X_i\}_{i=1}^m$  に対して、 $A_{ij} = cB([X_i, X_j], [X_i, X_j])$ 。ただし、 $[X_i, X_j] \in \mathfrak{k}$ ,  $B|_{\mathfrak{k} \otimes \mathfrak{k}}$  は負定値で  $c$  は正定数。

ここで、 $N = \{1 \leq i \leq m \mid A_{ij} > 0\}$  とし、行列  $(a_{ij}) = (E^{-1}A_{ij})$  を考え、次の条件を満たす。

- i)  $a_{ij} \geq 0$  ( $\forall i, j \in N$ ),  $\sum_j a_{ij} = 1$  ( $\forall i \in N$ )
- ii)  $N$  の部分集合  $N'$  が  $a_{ij} = 0$  ( $\forall i, j \in N'$ ) を満たせば、 $N'$  の元の個数  $\#N'$  は  $\frac{1}{2}m$  よりも小さい。
- iii) 次のように  $N$  の分割  $N = A \cup B$  は存在する。

$$a_{ij} = 0 \quad (\forall i \in A, \forall j \in B)$$

i) は明らかである。ii) は  $N'$  に対して  $\{X_i\}_{i \in N'}$  を考えれば、これは  $\mathfrak{m}$  の中の可換代数を生成し、従って  $\#N' \leq \text{rank } \tilde{M}$  である。irreducible symmetric space の rank は  $\frac{1}{2}n$  と知られる。

さすれば、 $\dim M = 2$  の場合を除いて、 $\text{rank } M < \frac{1}{2} \dim M$  が成り立つ。つまり、ii) が成立する。iii)  $\Rightarrow$  ii) は、

$\{X_i; i \in A\}, \{X_j; j \in B\}$  で生成される vector space  $M_A, M_B$  をとれば  $M = M_A + M_B, [M_A, M_B] = 0$ 。よって、 $M_A, M_B$  で生成される  $\mathfrak{L}$ -代数 (あるいは複素) をそれぞれ  $\mathfrak{A}, \mathfrak{B}$  とすれば、 $[M, M] = \mathfrak{L}$  より  $\mathfrak{A} = \mathfrak{A} + \mathfrak{B}, [\mathfrak{A}, \mathfrak{B}] = 0$ 。これは  $\mathfrak{A}$  の単純性に反する。

(a<sub>ij</sub>) に次の補題 4-2 を適用すれば、 $L$  の固有値  $\alpha$  に属する固有形式  $R$  を対角化して  $R^{ii} = \alpha^i$  とおいたとき、

$$\begin{aligned} \alpha(R, R) &= (LR, R) = R_{ij} L_{ij} R^{ii} R^{jj} = (-\varepsilon) \cdot \sum_j (\varepsilon^{-1} a_{ij}) \alpha^i \alpha^j \\ &= (-\varepsilon) \sum_j a_{ij} \alpha^i \alpha^j > \varepsilon \sum_i (\alpha^i)^2 = \varepsilon (R, R) \end{aligned}$$

即ち  $\alpha > \varepsilon$

Q.E.D.

### 補題 4-2

命題 4-1 の証明に於ける、行列  $S = (a_{ij})$  に關する  $\lambda > 0$  の条件が成り立つとは、 $S$  の固有値はすべて  $-1$  より大である。

(証明)  $S$  の固有値  $\lambda$  に属する固有ベクトル  $N = (n_i)$  をとる。

$\lambda < 0, \max |n_i| = 1$ , 更に  $n_i = 1$  なる  $i$  が存在するとしてお

す。

$$N = \{i \in \mathbb{Z} : 1 \leq i \leq m\} \quad O_i = \{j \in N : a_{ij} = 0\}$$

$$P = \{i \in N : n_i = 1\} \quad Q = \{i \in N : n_i = -1\}$$

とすれば、 $P \neq \emptyset$  であるから、 $i_0 \in P$  が存在して、

$$1 = \eta_{i_0} = \lambda^{-1} \sum a_{ii_0} \eta_i \leq -\lambda^{-1} \sum a_{ii_0} = -\lambda^{-1}$$

従、 $\lambda \geq -1$ 。 $\lambda = -1$  を証明すれば十分である。以下、 $\lambda = -1$  を仮定し、矛盾を導出しよう。

$\lambda = -1$  だから、上の不等式に等号が成立する。従、 $\lambda = -1$  ならば、上の不等式に等号が成立する。従、 $\lambda = -1$  ならば、上の不等式に等号が成立する。

$$(*) \quad i \notin O_{i_0} \text{ forall } i \in Q$$

(\*) と条件 i) によ、 $Q \neq \emptyset$ 。よ、 $j_0 \in Q$  が存在する。

$$\text{よ、} \quad 1 = -\eta_{j_0} = \sum a_{ij_0} \eta_i \leq \sum a_{ij_0} = 1$$

$$\text{よ、} \quad (**) \quad i \notin O_{j_0} \text{ forall } i \in P$$

よ、 $j \notin P \cup Q$  ならば、(\*) (\*\*) より  $j \in O_{i_0} \cap O_{j_0}$ 。

だから、 $i_0, j_0$  を動かして、

$$i \in P \cup Q, j \notin P \cup Q \text{ forall } a_{ij} = 0$$

を得る。  $A = P \cup Q, B = N - P \cup Q$  とすれば、条件 iii) によ、 $B = \emptyset$  である。よ、 $P \cup Q = N$ 。

$$B = \emptyset \text{ である。よ、} P \cup Q = N$$

一方、 $i, j \in P$  ならば、 $j \in Q$  だから (\*) により  $j \in O_{i_0}$  である。よ、 $a_{ij} = 0$ 。従、条件 iii) によ、 $\#P \leq \frac{1}{2} \#N$  である。同様、 $\#Q \leq \frac{1}{2} \#N$  である。よ、 $P \cup Q = N$  に反する。

Q.E.D.

### §5 locally symmetric space of compact type

最後に、定理 2-1 の、直接の計算による適用の例を示す。

(1) 水も  $(M, g)$  の universal covering  $(\tilde{M}, \tilde{g})$  が irreducible

symmetric space of compact type  $G/K$  として定義される。

[ Hermitian symmetric space ]

この場合は、E. Calabi & E. Vesentini, A. Borel により、固有値が計算されている。  $\alpha_0 > -\frac{1}{2}\varepsilon$  を満たす  $\alpha$  は、次の3種である。

$$A_{III} \quad SU(m+m')/S(U_m \times U_{m'})$$

$$(m=1, m' \geq 4), (m'=1, m \geq 4)$$

$$D_{III} \quad SO(2m)/U(m) \quad (m \geq 6)$$

$$E_{IV} \quad E_7/E_6 \cdot T^1$$

[ 一般の場合 ]

一般の場合も、原理的には計算可能であるが、繁雑なので2例を挙げるにとどめる。  $\alpha_0 > -\frac{1}{2}\varepsilon$  を満たす  $\alpha$  は、  $p \geq q$  なる条件のもとに次の通りである。

$$BDI \quad SO(p+q)/SO(p) \times SO(q)$$

$$(p \geq 4, q=1), (q \geq p-1, p+q \geq 7)$$

$$CII \quad (p=q=1), (p \geq 3, q=1)$$

$$Sp(p+q)/Sp(p) \times Sp(q)$$

## 参考文献

- M. Berger, Quelques formules de variation pour une structure riemannienne, Ann. scient. Éc. Norm. Sup, 4<sup>e</sup> série, t. 3, (1970). 285-294
- M. Berger & D. Ebin, Some decomposition of the space of symmetric tensors on a riemannian manifold, J. Diff. Geom. 3 (1969) 379-392
- A. Borel, On the curvature tensor of the Hermitian symmetric manifolds, Ann. of Math. 71 (1960) 508-521
- E. Calabi & E. Vesentini, On compact, locally symmetric Kähler manifolds, Ann. of Math. 71 (1960) 472-507
- D. Ebin, The manifold of riemannian metrics, Proc. of the 1968 Summer Institute on Global Analysis, Amer. Math. Soc.